

5つのポイントで子どもの目に輝きを

組織局長

岡本

美穂

学力づくりについて考える際には、必ずこの本を読むようにしています。

「よい目」が増える「好き」になる

自分の力で問題が解けたという成功体験は、脳に快の刺激をもたらしますから、もっと問題を解きたくなる。快、不快の判断に深く関わっているのは、扁桃体という器官です。成功体験を積み重ねながら、同じ種類の問題を繰り返し解いているうちに、その「よい」に関する脳内のネットワークが強化されます。もっと速く、確実に解けるようになるわけです。と同時に、脳が次の段階に成長する準備が整います。ここでまた親や学校の先生が上手に導くことで、もう一つで「よい」をつくってあげると、算数の授業中、子どもが動く場面がさらに増えます。目に輝きが出てくる。成功体験をする機会が増えますから、扁桃体が快と判断する場面も増える。そして、自分ができ

ること「自信があること」が増えれば増えるほど、脳がよく動いている時間が長くなり、快の感情が大きくなり、算数の勉強が好きになつく。その「好き」という感情が、辛さや大変さを乗り越えさせる意欲を生むのです。

築山 節 『脳と気持ちの整理術』

ニク出版

目に輝き、という一見抽象的に見える言葉ではありますが、教師をしているとすぐにイメージできると思います。この目の輝きというものを我々教師は、いつでも求めてしまいがちです。そのためはどうするかというと、子どもを喜ばせるために、特別活動の時間を使ってレクリエーションをしたり、「勉強してしんどいよね、けど頑張っで乗り越えよう」というような言い方で子どもを励まし、お楽しみ会、宿題なしという子どもに媚びているような実践ばかりをしてしまっているということが普通にある

のです。(私もそういう時期があったからこそ気持ちが変わるのです。)だからと言ってそういう先生を責めたいわけではありません。そんなものに縛られなくても、きちんと見通しを持って整えれば子どもは変わっていくことをお伝えしたいのです。

つまり、基礎基本を身につける過程、実践こそが子どもをすぐに輝かせることができますということ。そのためポイントが5つです。

ポイント

1. 優劣がわかりにくい。
2. 逆転現象がある。
3. 少しの時間で行える。
4. 心地よさ
5. さぼっている子どもが目立たない

1. 優劣がわかりにくい。

例えば、作文だと、書かれている内容によって、子どもに優劣がある程度伝わってしまうものです。しかし、詩は短い文の集まりのため、子どもにはよくわかりません。比較はしますが、そこに優劣の感情は生ま

れにくいです。子どもが自ら勝負をしかけたりすることは好きですが、勝手に「できる」「できない」とわかってしまうものには「成功体験」が生まれにくいです。つまり、やる気が出ないということです。だからこそ、一日一日の成長を子ども自身に意識させながら実践をすすめていきます。

2. 逆転現象がある。

国語の授業でよく発言するとか、ノートがきれいとかいうような、「賢い」と子ども同士が思っている子どもとは違う子どもたちが、あらゆる場面で輝きだすように普段心がけています。例えば、国語嫌いの原因は、努力と結果が比例しないということですからこそ、音読一つとつても、やればうまくなる、という成功体験+自信のない子どもが目立つように、新しい文ばかり音読するのではなく、一文を何度も練習して、成長の具合で評価するようにしています。それは、子どもの変容がわかりやすい実践の一つだからです。

高学年なら声のハリにこだわりながら、出だし練習を2、3回ほど行います。ただ

し、一斉音読だけでは、全員参加しているかわかりません。何よりも教師自身が全員参加していると思いついてしまい、読めなくて困っている子どもを見逃してしまうこともよく起こります。だからこそ、個人練習とグループ練習を積み重ねていきます。

3. 少しの時間で行える。

個人を鍛えるには、どこでその時間を確保するのか、どのような手だてを行うべきなのかが問われますが、5分あれば子どもを伸ばすことはできます。

「毎日漢字テスト」を5分ほどで行っています。熟語テストで、3問は新しい熟語、あとの2問は前日間違いの多かった熟語を口頭で言い、宿題プリントの隙間に書かせています。そしてそれをその日の間に答え合わせをして返しています。しかしこれが非常に結果につながりやすい実践でした。子どもの間違いやすい漢字も把握できますし、子どもも毎日やっていくので慣れてきていつの間にかかけるといことも増えてきていました。習慣化することに成功したからです。

4. 心地よさ

心地よさは、学級でしか鍛えられません。甘いものを食べても、温泉に入っても、マッサージを受けても「心地よいな」と感じることではできません。しかし、学級での心地よさとは全く違います。ここでの心地よさとは、やればやるほど、凛々しい姿に自分はなっていると自覚できる、自分の成長を自覚できることで、「心地よい」と感じることです。つまり、この心地よさは勝手に身につくものではないということです。つまり実践で「心地よさを鍛える」のです。この感覚がつかめるようになると学級でのあらゆる実践が進化します。心地よさを土台にして「やる気」は伸びていくからです。

5. さぼっている子どもが目立たない

頑張っている子どもこそがキラキラと輝き、それが学級の雰囲気になっっているというのがポイントです。

基礎基本はすべての力の土台になります。成功体験を意識して教師も子どもも目を輝かせることが今こそ大切ではないでしょうか。